

膵臓がん、薬剤耐性獲得の仕組み 世界初 福医大が解明

新治療戦略の確立期待

福島医大医学部生化学講座の刈谷慶喜准教授、西田満教授らの研究グループは、致死率の高い膵臓がんの治療の代表的な抗がん剤「ゲムシタビン」が膵がん細胞に薬への耐性をつけ、悪性化を促進する仕組みを世界で初めて解明した。ゲムシタビンはがん細胞を死滅させる効果が高い一方で、がん細胞が薬剤耐性を獲得した場合に再発した際に転移や増殖の頻度が高まり治療が困難とされてきた。今回の研究成果によって、悪性化の原因を標的とした新たな治療薬の開発などにつながれば、より効果的な治療戦略を確立できると期待される。福島医大が8日、発表した。



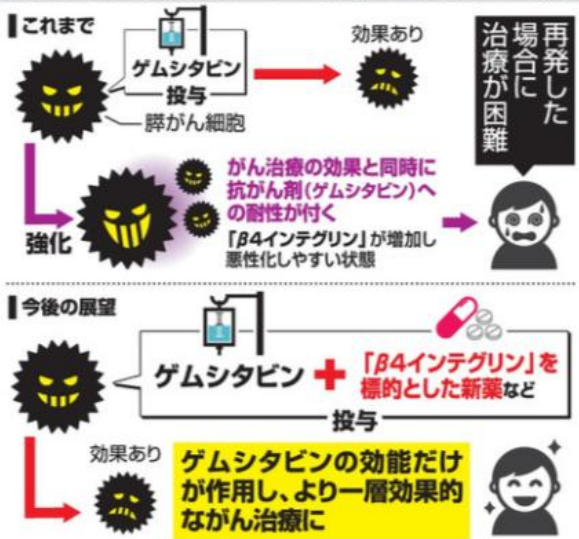
刈谷慶喜
准教授

ゲムシタビンは治療の効果が非常に高いが、手術の有無にかかわらず、ほとんどの患者に対して治療薬として使われている。研究チームによると、多くの患者が治療の途中段階で薬剤耐性が

つき、治療の中断などによって8割以上が2年以内にがんを再発しているという。再発したがんは他の臓器への転移や増殖などの悪性度がより高くなり、回復の経過も悪いとされる。こうした現状などを踏まえ、近年の膵臓がんを含めたがん研究全般では「抗がん剤での化学療法そのものが、薬物耐性や転移を促進しているのではないか」との可能性が示唆されていた。

研究グループはこの仮説を証明すべく、2021（令和3）年ごろから研究を開始。ゲムシタビン耐性を持つ膵がん細胞を独自に作り出し、薬剤の追加投与によっ

福島医大の研究成果による膵臓がん治療への効果



研究グループは「膵臓は「沈黙の臓器」とも呼ばれ、がんが発生しても初期段階では症状が出にくいことで知られる。発覚した時には既に重症化しているケースが多く、5年生存率が10%以下と極めて低い。膵臓は「沈黙の臓器」とも呼ばれ、がんが発生しても初期段階では症状が出にくいことで知られる。発覚した時には既に重症化しているケースが多く、5年生存率が10%以下と極めて低い。